ODA と NGO の連携 ～ より効果的な国際協力を目指して（３）

第３回：国際耕種と NGO－我々の取組み

我が国際耕種はご存じの通りこれまで政府開発援助による技術協力や開発調査に関わる業務を実施してきているが、当初から途上国援助における ODA と NGO の連携の重要性を強く感じてきた。そして、様々な場面での NGO との協調・連携に努めてきた。具体的には、・・・

適正技術の開発（1986～）	乾燥地・半乾燥地域における開発プロジェクトに対して、井戸掘り技術（上総堀り）、風力を利用した井戸水の汲み上げ（ゼファタービン）、ウォーターハンマーポンプ等の適正技術を導入するための活動を実施した。たとえば、「風の学校」「サヘルの会」のスタッフ等とともに井戸掘りの実習を行った。
JVC:Japan Volunteer Center への活動支援（1987～）	ソマリア、エチオピアにおける JVC の現地での活動を側面から支援した。さらに国内においても、実際の農作業を体験するために千葉県東金市の農家に実践の場を確保し、現地プロジェクトに参加できる人材の育成に努めた。
サヘルの会への活動支援（1989～）	「サヘルの会」（現 NPO 法人　サヘルの森）とは設立段階から関わり合っており、国内及び現地での活動に直接参加している。特に、乾燥地における植林活動に関しては、適正樹種の選定や種子の供給、育苗や植栽技術に関わる技術開発を実施している。
ケニア・タナデルタの環境モニタリング(1990～)	ケニア・タナデルタの灌漑開発プロジェクトでは、環境モニタリングを担当。ここでは、現地の環境 NGO のスタッフによるチームを組織して定期的な環境モニタリングを実施した。
自然保護に関わる NGO の活動調査（1995～）	国内の自然保護関連 NGO 及び生物多様性に関わる政府機関や研究機関等の海外での活動状況の調査を行って、その活動の概要を把握し、それらの類型化、地域別整理を行った。また、主要国際機関や主要国際 NGO の活動状況についても概要を把握し、国際的な動向を分析した。
ジンバブエで独自に実施しているプロジェクト形成調査（1997～）	住民参加、適正技術、スモールスケール（あるいは適正規模）、持続可能性、といったことがらがキーワードとなるようなプロジェクトを計画し、現地の NGO 主体で実施していく予定である。
助成団体データベースの作成業務（1999～）	農業や環境に関わる NGO に対して助成を行う国内の助成団体のデータベースの作成を行っている。
「開発パートナー事業」への応募（1999～2000）	パキスタンにおける住民参加型流域管理計画に関するプロポーザルを作成し、応募した。

ジンバブエで独自に実施している調査に関して詳しくは次回以降に譲ることとするが、これまで 1997 年より日本での情報収集をはじめとして、のべ３回にわたり現地調査を行ってきた。今後、住民のニーズにあったプロジェクトを現地の NGO と共に計画し実施していく予定であるが、環境の保全を考慮し、適正規模と適正技術により、持続可能性があり、なおかつ住民の参加を伴ったものであることを常に念頭におきたい。そして将来このような形のプロジェクトが ODA により実施されるようになることを期待したい。また、これを通じて草の根住民のための援助というものについて考えながら、現在の ODA の仕組み・あり方について捉え、より一層良いものにしていくという狙いもある。従って、外務省の「草の根無償資金協力」や「NGO 事業補助金制度」をはじめとして、JICA の「開発福祉支援事業」、そして「開発パートナー事業」といった草の根の活動をする NGO/NPO を巻き込んだ援助スキームが日本の援助機関でも実施されるようになってきたことは、喜ばしいことと考える。

我々は、国内の NGO とも幅広いネットワークを有しており、ジンバブエに限らず現地の NGO の情報もある程度把握しているつもりである。従って、開発パートナー事業をはじめとする、JICA が NGO を巻き込んだ形でのプロジェクトの展開には、これからも率先して取り組んでいきたい。また、JICA との連携のみならずたとえ小さくとも NGO との連携によって真に地域住民の役に立つ活動を実践することが、我々が理想とする途上国援助である。